

## イネ縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカを防除するため 箱施用剤を用いた防除対策を実施しましょう！

令和 6 (2024) 年 11 月に、イネ縞葉枯病 (写真 1) の媒介虫であるヒメトビウンカ (写真 2) の越冬世代幼虫の保毒虫率と生息密度の調査を実施しました。調査結果を参考に適切な防除対策を実施し、縞葉枯病の発生を防ぎましょう。

- ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、県平均 5.0% と昨年 (4.4%) と同様でしたが、防除が必要とされる保毒虫率 10% を超えていた地点がみられました。保毒虫率の推移を地域別に比較すると、直近 3 年間では、県北部および県中部は増加傾向にある一方で、県南部はほぼ横ばいでした (表 1)。
- ヒメトビウンカの越冬世代幼虫の生息密度は、県平均 3.9 頭/10 m<sup>2</sup> と平年より低い結果でした (図 1)。



写真 1 イネ縞葉枯病 (ゆうれい症状)



写真 2 ヒメトビウンカの幼虫

表 1 ヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率 (%)

年度 地点名	R4 2022	R5 2023	R6 2024
大田原市蛭畑	0	4.2	2.1
大田原市親園・実取	2.1	0	3.1
那須烏山市滝田	1.0	0	1.0
さくら市蒲須坂	3.1	6.3	8.3
高根沢町花岡	2.1	3.1	11.1
<b>県北部平均</b>	<b>1.7</b>	<b>2.7</b>	<b>5.1</b>
真岡市横田	-	5.2	3.1
宇都宮市横山	1.0	7.3	2.1
宇都宮市雀宮	3.1	5.2	21.9
上三川町上三川	6.3	14.6	6.3
鹿沼市酒野谷	1.0	4.2	9.4
<b>県中部平均</b>	<b>2.9</b>	<b>7.3</b>	<b>8.5</b>
下野市小金井	1.0	5.2	2.1
小山市小薬	4.2	3.1	3.1
小山市石ノ上	0	4.2	2.1
壬生町助谷	2.1	5.2	2.1
栃木市惣社	3.1	5.2	0
栃木市大平町真弓	1.0	4.2	11.5
栃木市藤岡町富吉	1.0	1.1	5.6
佐野市堀米	4.2	4.2	0
足利市上洪垂	0	2.1	0
<b>県南部平均</b>	<b>1.9</b>	<b>3.8</b>	<b>2.9</b>
<b>県平均</b>	<b>2.1</b>	<b>4.4</b>	<b>5.0</b>

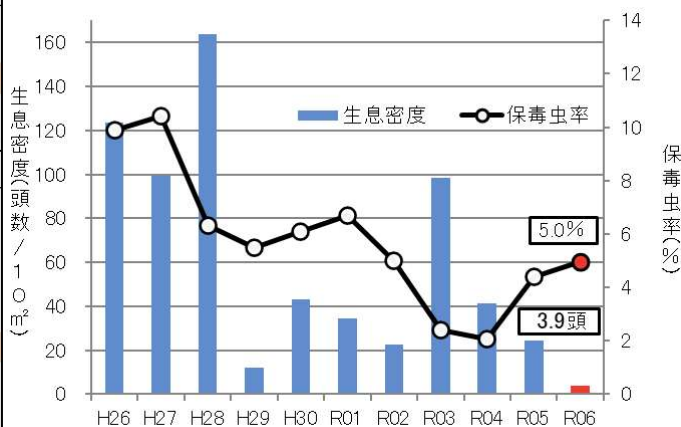


図 1 ヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率及び生息密度の推移

### □防除対策

水稲の育苗時に箱施用剤 (表 2) を使用し、ヒメトビウンカを防除する。特に、前年に縞葉枯病が多発したほ場に作付けする場合には防除を徹底する。

表2 ウンカ類に登録のある主な箱施用剤（令和7（2025）年2月28日現在）

農薬名	使用量	使用方法	使用時期	本剤の使用回数	成分	農薬の系統	RACコード	ウンカ類以外の主な適用病害虫			
								ニカメイチュウ	カメムシ類	いもち病	紋枯病
<b>●殺虫剤</b>											
リディアNT箱粒剤	育苗箱 (30×60×3cm、使用 土壌約5L) 1箱当り 50g	育苗箱の上から均一に散布する。	は種時(覆土前)～移植当日	1回	フルピリミン	その他	1:4F				
フェルテラゼクサロン箱粒剤				1回	トリフルメゾピリム	その他	1:4E				
					クロラントラニリプロール	ジアミド	1:28				
ゼクサロンパディート箱粒剤				1回	トリフルメゾピリム	その他	1:4E				
				1回	シアントラニリプロール	ジアミド	1:28				
<b>●殺虫殺菌剤</b>											
稲名人箱粒剤	育苗箱 (30×60×3cm、使用 土壌約5L) 1箱当り 50g	育苗箱の上から均一に散布する。	は種時(覆土前)～移植当日	1回	オキサゾスルフィル	スルフィル	1:37	○		○	
防人箱粒剤				1回	イソチアニル	その他(殺菌)	F:P03				
					トリフルメゾピリム	その他	1:4E				
					クロラントラニリプロール	ジアミド	1:28	○		○	
スタウトダントツ箱粒剤				1回	イソチアニル	その他(殺菌)	F:P03				
					クロチアニジン	ネオニコチノイド	1:4A	○		○	
エバーゴルフォルテ箱粒剤			1回	イソチアニル	その他(殺菌)	F:P03					
				イミダクロプリド	ネオニコチノイド	1:4A			○		
ルーチンアドスピノ箱粒剤			1回	イソチアニル	その他(殺菌)	F:P03					
				イミダクロプリド	ネオニコチノイド	1:4A	○		○		
ツイインターボ箱粒剤08	1回	スピノサド	スピノシン	1:5							
		イソチアニル	その他(殺菌)	F:P03							
ロングリーチ箱粒剤	1回	クロチアニジン	ネオニコチノイド	1:4A							
		イソチアニル	その他(殺菌)	F:P03			○				
Cs.オリゼリディア箱粒剤	1回	ジノテフラン	ネオニコチノイド	1:4A							
		プロベナゾール	その他(殺菌)	F:P02		○*	○				
				1回	フルピリミン	ピリジリデン	1:4F	○		○	
				1回	プロベナゾール	その他(殺菌)	F:P02				

・ウンカ類以外の主な適用病害虫は、○のある病害虫に登録がある。  
 ・\*ロングリーチ箱粒剤でカメムシ類を防除するときは移植当日に使用する。

詳細は、農業総合研究センター（TEL 028-665-1244）までお問合せ下さい。病害虫情報発表のお知らせは「農政部X（旧ツイッター）（@tochigi\_nousei）」、栃木県農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/>）でもご覧になれます。



## いちごのアザミウマ類の発生増加に注意しましょう

### 1 発生状況

3月のいちご巡回調査では、アザミウマ類がやや多い発生であり（発生ほ場率 39.7%（平年比 179.6%）、寄生花率 5.0%（平年比 278%））、多発ほ場も散見されました。

気象庁の1か月予報（3月8日～4月7日）では、平年と同様に晴れの日が多く、平均気温は高い確率が50%と、アザミウマ類の増殖や活動に好適なため、今後の被害増加が懸念されます。

### 2 被害

県内のいちごほ場ではヒラズハナアザミウマが優占しており（写真1）、ハナアザミウマ、ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ（写真2）等も発生します。いずれの種も主に花に飛来して産卵します。ふ化した幼虫は幼果の表面を加害するため、表面がサビ状となる被害果を生じます（写真3）。

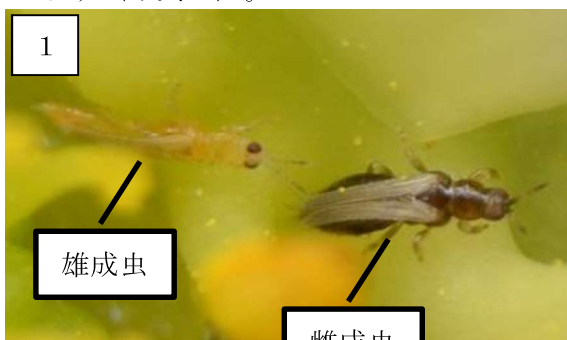


写真1 ヒラズハナアザミウマ雄成虫(左)と雌成虫(右)  
(雌成虫は褐色から黒褐色で1.3～1.7mm、雄成虫は明黄色で1～1.2mmとやや小さい)

写真2 ミカンキイロアザミウマ雌成虫  
(雌成虫は橙黄色から褐色で1.4～1.7mm、雄成虫は明黄色で1～1.2mmとやや小さい)

写真3 被害を受け表面がサビ状となった幼果

### 3 防除対策と注意点

- ・着色前の未成熟果は表面が白色で被害が観察しやすい。表面がサビ状となった被害果がみられたら、ハウス内で幼虫が発生している目安なので防除する。
- ・花をよく観察し、**1割以上の花でアザミウマ類の寄生が確認されたら、速やかに防除する。**
- ・**秋に発生が確認されたハウスでは、春先に被害を生じやすい。**特に開花の早いとちあいかでは、秋の発生が多くなる傾向があるので注意する。
- ・開花した雑草等にも生息するので、**ハウス内外の除草を徹底する。**
- ・4月以降、野外でのアザミウマ類の活動が活発となり、ハウスへの侵入が急増するため、花への寄生状況をこまめに確認する。青色粘着板を用いた発生状況の確認も効果的である。
- ・**多発時には防除を実施しても再発生しやすい。**薬剤のかかりにくい卵や蛹が残るので、それらがふ化・羽化するおおよそ**5日後に必要な応じて追加防除する。**
- ・アザミウマ類は種類によって薬剤の防除効果に違いがあり、ミカンキイロアザミウマに対しては、ピレスロイド系 (IRAC:3A) やスピノシン系 (5) の薬剤は防除効果が劣ることが多い。薬剤防除を実施しても効果が低く、ミカンキイロアザミウマの発生が疑われる場合にはファインセーブフロアブルを使用する。ただし、ヒラズハナアザミウマ（体色が濃い）には効果が低いので、本種が優占する場合には注意する。  
(参考：[いちごときくに発生したアザミウマ類の薬剤感受性検定結果について](#))
- ・侵入抑制のため、開口部への防虫ネット、反射資材織込ネットの設置も効果的である。

表1 いちごのアザミウマ類またはミカンキイロアザミウマに登録のある主な薬剤  
(令和7(2025)年3月11日現在)

農薬名	希釈倍数 又は 使用量	使用時期	本剤の 使用 回数	成分	農薬の系統	IRAC コード (注)
<b>●発生初期に効果的な薬剤</b>						
マッチ乳剤	1000～ 2000倍	収穫前日まで	4回	ルフェヌロン	ベンゾイル尿素 (IGR脱皮阻害)	15
ベネビアOD	2000倍	収穫前日まで	3回	シアントラニリブ ロール	ジアミド	28
<b>●発生が多いときに効果的な薬剤 (ミツバチ・天敵への影響に注意)</b>						
スピノエース 顆粒水和剤	5000倍	収穫前日まで	2回	スピノサド	スピノシン	5
ディアナSC	2500～ 5000倍	収穫前日まで	2回	スピネトラム	スピノシン	5
ダブルシューターSE	1000倍	収穫前日まで	2回	脂肪酸グリセリド ・スピノサド	気門封鎖系 ・スピノシン	5、 未分類
アーデント水和剤	1000倍	収穫前日まで	4回	アクリナトリン	ピレスロイド	3A
グレーシア乳剤	2000倍	収穫前日まで	2回	フルキサメタミド	イソオキサゾリン	30
<b>●ミカンキイロアザミウマの発生が疑われる場合</b>						
ファインセーブ フロアブル	1000～ 2000倍	収穫前日まで	3回	フロメトキン	キノリン	34
<b>●天敵製剤 (発生初期に使用)</b>						
ククメリスEX	200頭/m <sup>2</sup>	発生初期	-	ククメリスカブリ ダニ	天敵	未
メリトップ	100頭/株	発生初期	-			

注：薬剤感受性低下を防ぐため、IRACコードが同じ薬剤の連用は避ける。

詳細は、農業総合研究センター (Tel 028-665-1244) まで  
お問合せ下さい。病害虫情報発表のお知らせは「農政部X (旧ツイッター  
([@tochigi\\_nousei">@tochigi\\_nousei](https://twitter.com/tochigi_nousei)))」、栃木県農業総合研究センターホームページ  
(<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/>) でもご覧になれます。



## タマネギべと病の発生に注意しましょう！

### 1 発生状況

3月上旬に県内6地点で行った調査において、タマネギべと病（一次感染株）の発生が多い状況です。発生ほ場率は66.7%と高く、平年の2倍の発生となっています。

一次感染株で形成された分生胞子が飛散し、二次感染を起こすため、今後の発生拡大に注意が必要です。

また、気象庁の1か月予報（3月15日～4月14日）によると、気温が高い確率は40%、降水量が多い確率は40%であり、これらの条件は本病の発生を助長する可能性があります。

以下の防除対策を参考にして、本病の発生拡大を防止しましょう。

### 2 症状と発生生態

#### ① 一次感染株 》》 現在、ほ場で発病が確認されている株

【病徴】：草丈が低く、葉が外に湾曲し、やや黄化（写真1）  
葉身上に灰色～灰褐色の多数の分生胞子を形成

【感染源】：苗床や定植後のほ場に残った残さや土壌中の病原菌

【感染時期】：11～12月



#### ② 二次感染株 》》 今後、発生の拡大が懸念される株

【病徴】：葉身に黄色で大型の長卵形～楕円形をした病斑を形成（写真2）

【感染源】：一次感染株に形成された分生胞子（写真3）

【感染時期】：3～5月



分生胞子による感染と発病を繰り返す



写真1 一次感染株



写真2 二次感染株



写真3 分生胞子

### 3 防除対策

- ・感染前から予防効果のある薬剤を散布する（表1）。
- ・発生を認めた場合には速やかに抜き取り、直ちに治療効果のある薬剤を散布する（表1）。  
なお、抜き取った発病株は伝染源となるため、ほ場外で適切に処分する。
- ・薬剤感受性低下を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- ・前年、発生が多かったほ場では、発生が増えるおそれがあるので、特に注意してほ場を観察する。
- ・ほ場の排水が悪いと発病が助長されるため、排水対策を徹底する。

表1 タマネギべと病に登録のある主な薬剤（令和7（2025）年3月14日現在）

効果 (目安)	農薬名	希釈倍数 (倍)	使用時期	本剤の 使用回数	FRAC コード	有効成分	有効成分の 総使用回数
予防	ジマンダイセン水和剤	400～600	収穫3日前まで	5回以内	M3	マンゼブ	5回以内
	M I Cベンコゼブ水和剤	400～600	収穫3日前まで	5回以内	M3	マンゼブ	5回以内
	ドーシャスフロアブル	1000	収穫7日前まで	4回以内	M5 21	T P N シアゾファミド	6回以内 4回以内
	フロンサイドS C	1000～ 2000	収穫3日前まで	5回以内	29	フルアジナム	7回以内 <sup>1)</sup>
	ピシロックフロアブル <sup>2)</sup>	1000	収穫前日まで	3回以内	U17	ピカルブトラゾクス	3回以内
予防・ 治療	リドミルゴールドM Z	500～ 1000	収穫7日前まで	3回以内	M3	マンゼブ	5回以内
					M4	メタラキシルM	4回以内 <sup>3)</sup>
	プロポーズ顆粒水和剤	1000	収穫7日前まで	3回以内	M5 40	T P N ベンチアバリカルブイソプロピル	6回以内 3回以内
	ダイナモ顆粒水和剤	2000	収穫3日前まで	3回以内	21	アミスルブロム	3回以内
					27	シモキサニル	3回以内
	ザンプロDMフロアブル	1500～ 2000	収穫7日前まで	3回以内	45	アメトクトラジン	3回以内
					40	ジメトモルフ	3回以内
	ジャストフィットフロアブル	3000	収穫7日前まで	3回以内	43	フルオピコリド	3回以内
					40	ベンチアバリカルブイソプロピル	3回以内
	ホライズンドライフロアブル	2500	収穫3日前まで	3回以内	27	シモキサニル	3回以内
11					ファモキサドン	3回以内	
オロンディスウルトラS C	2000	収穫前日まで	2回以内	49	オキサチアピプロリン	2回以内	
				40	マンジプロパミド	2回以内	

1)：全面土壌混和は1回以内、苗根部浸漬は1回以内、散布は5回以内

2)：適用作物は鱗茎類

3)：種子への処理は1回以内、は種後は3回以内

- ・詳細は、農業総合研究センター（TEL 028-665-1244）までお問合せ下さい。
- ・病虫害情報発表のお知らせは「農政部X（旧ツイッター）（@tochigi\_nousei）」、
- ・栃木県農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/>）でもご覧になれます。



## 県南部でイネカメムシの越冬を確認しました

昨年引き続き水稲における被害が懸念されます

不稔・斑点米を防止するため適期防除に努めましょう！

イネカメムシは、昨年、県南部を中心に水稲で大きな被害を生じさせました。本種は従来の斑点米カメムシ類と異なり、**稲の出穂期頃の加害で不稔を、乳熟期頃の加害で斑点米を生じさせる**被害の大きな害虫です。

今後の水稲での発生を予測するため、1月下旬～3月中旬に、県内全域（25市町、全98地点）で越冬状況調査を実施しました。その結果、県南部の7市町でイネカメムシの越冬を確認しました（図1：■色の市町、写真1、2）。7市町では、本種は30地点中22地点（73%）と高頻度で確認されました。

**イネカメムシの越冬が確認された地域では、今後、水稲に被害が発生することが懸念されます。被害が生じないように、必ず出穂期頃と、その7～10日後（乳熟期頃）に液剤で防除しましょう。また、本種の越冬が確認されなかった地域（図1：□色及び○色の市町）においても、発生が懸念されるため、定期的にほ場を確認し、早期発見、適期防除に努めましょう。**

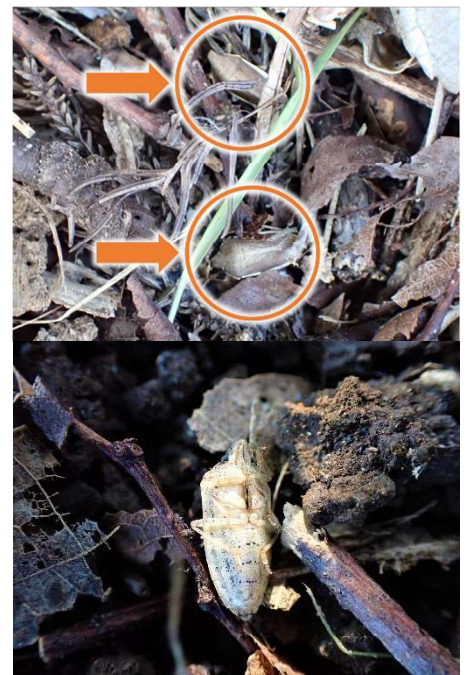
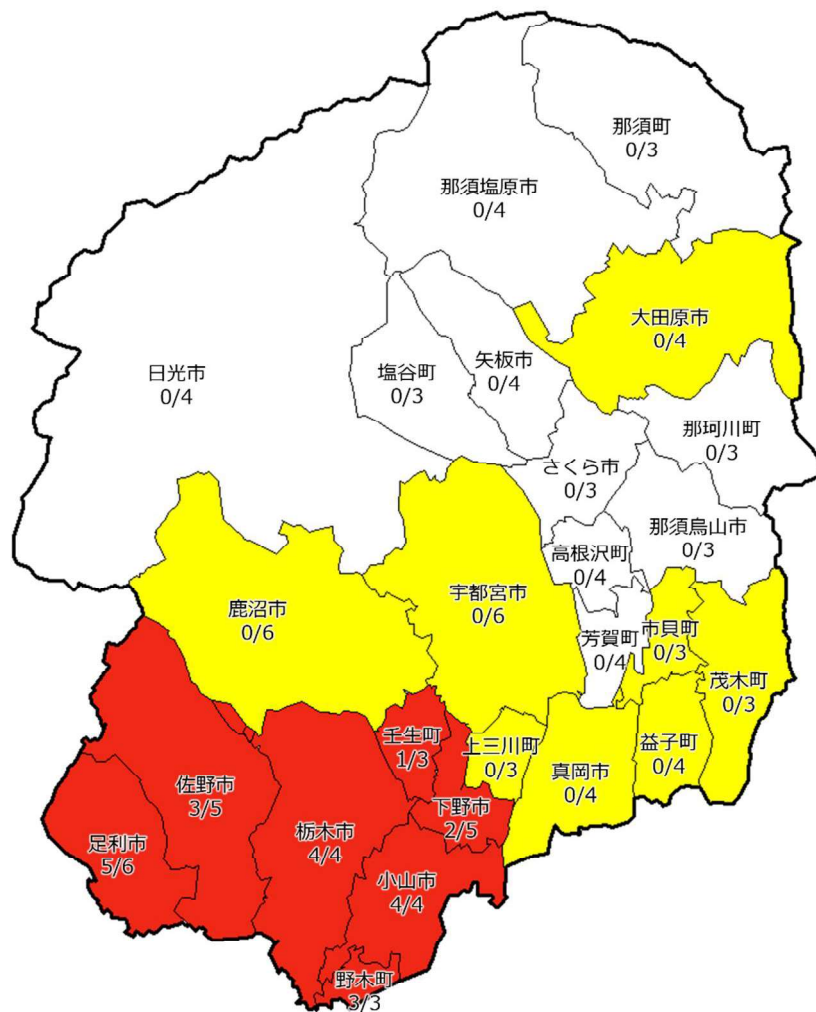


写真1 落葉下の越冬成虫  
 （上：背面、下：腹面）



写真2 越冬確認地点の様子

図1 イネカメムシの越冬確認状況

※ 図中の数字は、越冬確認地点数/調査地点数

■：越冬が確認された市町

□：越冬は確認されなかったが、前年の水稲ほ場等で発生を確認した市町

【防除対策－薬剤防除（出穂期以降）－】

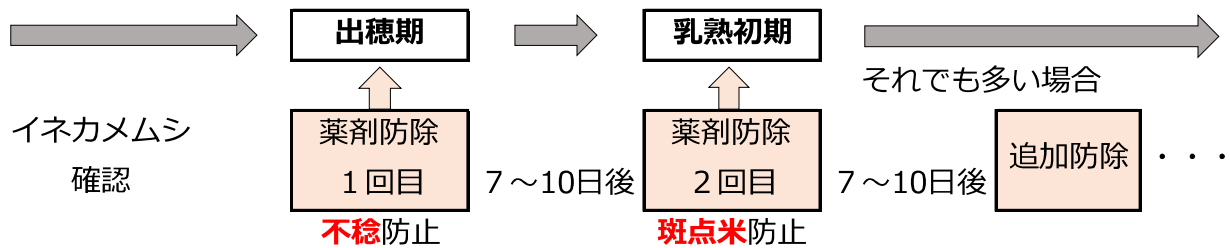


図2 イネカメムシの適期防除のイメージ

- 1 **不稔防止対策として出穂期頃と、斑点米防止対策として出穂期の7～10日後（乳熟初期頃）**に液剤を散布して防除する（図2、表1）。  
 その後も本種を含めた斑点米カメムシ類がほ場内で確認された場合は、斑点米防止対策として、7～10日間隔で1～2回**追加防除**する。  
 ※ イネカメムシの越冬成虫は水稻の出穂期頃に盛んに本田に侵入し、穂を加害して不稔を生じさせる。さらに乳熟期頃、ほ場内で発生した本種の幼虫や、本種以外の斑点米カメムシ類が穂を加害して斑点米を生じさせる。  
 ※ カスミカメ類等の小型のカメムシ類には粒剤や豆粒剤の防除効果があるが、イネカメムシ等の大型のカメムシ類は粉剤や液剤で防除する（直接薬剤がかからないと薬剤の効果が十分に発揮されないため）。
- 2 **各地域の防除組織と連携した地域一斉防除**、ドローンによる薬剤散布等により適期防除を実施する。また、発生予察情報を参考に早めに防除の準備を行う。

表1 水稻のカメムシ類に登録のある主な薬剤（令和7（2025）年3月12日現在）

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期	本剤の 使用回数	成分	農薬の系統	IRAC コード
スミチオン 乳剤	1000倍	収穫21日 前まで	2回以内	MEP	有機リン系	1B
キラップ フロアブル	1000～ 2000倍	収穫14日 前まで	2回以内	エチプロール	フェニル ピラゾール	2B
トレボン EW	1000倍	収穫14日 前まで	3回以内	エトフェン プロックス	ピレス ロイド	3A
スタークル 液剤10	1000倍	収穫7日 前まで	3回以内	ジノテフラン	ネオニコチ ノイド	4A
エクシード フロアブル	2000倍	収穫7日 前まで	3回以内	スルホキサ フロル	スルホキシ イミン	4C

注1：IRACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

注2：斑点米カメムシ類の薬剤防除は、水田周辺のミツバチに影響を及ぼす可能性があるため、地域の養蜂家へ薬剤防除日を事前に周知する等の積極的な対応を行う。

詳細は、農業総合研究センター（Tel 028-665-1244）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「農政部X（旧ツイッター）(@tochigi\_nousei)」、栃木県農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/>)でもご覧になれます。

カメムシ防除作戦HP (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g05/kamemushi.html>)もご覧ください。



農業総合研究センターHP



カメムシ防除作戦HP

## 麦類の赤かび病を適期に防除しましょう！

当センター（宇都宮市）では、ニューサチホゴールドデン（二条大麦）が平年より4日早い4月14日に出穂しました。今後1か月の気温は高く、赤かび病の発生が懸念されますので、以下の防除対策を参考に**適期防除に努めましょう。**

- ・麦類の赤かび病は、収量・品質を低下させる重要病害です（写真1）。本病菌は、人畜に有害なかび毒（DON、NIV等）を産生するため、農産物検査の規格では、食用の全麦種で赤かび粒の混入限度が0.0%を超えないこと、と定められています。
- ・予防的に防除を行い、発生防止に努めることが重要です。



写真1 赤かび病(二条大麦)  
穎の合わせ目に鮭肉色のかびを生じる。

### 【防除対策】

- ・出穂や開花の状況をよく観察し、ほ場・麦種ごとの防除適期（表1）を逃さないよう、防除を徹底する（降雨が続く場合でも、短い晴れ間を利用して防除を行う）。
- ・不稔粒が発生したほ場は、赤かび病多発のおそれがあるため、追加防除を実施する。
- ・薬剤感受性の低下を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する（表2）。
- ・無人航空機による散布は、一般の散布とは希釈倍数（散布液量）が異なるので注意する（表3）。

表1 麦種ごとの防除適期

麦種	防除適期	多発のおそれがある場合 (不稔粒発生や登熟期連続降雨時の追加散布)
二条大麦	穂揃い期7～10日後（葯殻抽出期※1） 写真2	1回目の7～10日後に2回目散布
六条大麦	開花始※2と開花10日後の2回散布 写真3	3回目散布（収穫前日数に注意）
小麦	開花始※2と開花20日後の2回散布 写真4	3回目散布（収穫前日数に注意）

※1：穎の先端から葯殻(受粉を終えた葯の殻)が押し出されてくる時期

※2：抽出した葯殻を初めて認めた日



写真2 【二条大麦】  
穂揃い期7～10日後  
(葯殻抽出期)



写真3 【六条大麦】  
開花始



写真4 【小麦】  
開花始

※矢印で示す部分が抽出した葯殻

表2 麦類の赤かび病に登録のある主な薬剤（令和7（2025）年4月9日現在）

農薬名	作物名	希釈倍数 (散布液量)	収穫前日数/ 本剤の使用回数	薬剤系統名	FRAC コード
シルバキュアフロアブル	大麦	2000倍 (60~150L/10a)	14日前まで/2回以内	DMI剤	3
	小麦		7日前まで/2回以内		
ワークアップフロアブル	麦類	2000~3000倍 (60~150L/10a)	7日前まで/3回以内		
チルト乳剤25	大麦	1000~2000倍 (60~150L/10a)	21日前まで/1回		
	小麦		3日前まで/3回以内		
トップジンMゾル	麦類 (小麦を除く)	1500倍 (60~150L/10a)	14日前まで/3回以内 (出穂期以降は1回以内)		
	小麦	1000~1500倍 (60~150L/10a)	14日前まで/3回以内 (出穂期以降は2回以内)		
トップジンM水和剤	麦類 (小麦を除く)	1000~1500倍 (60~150L/10a)	30日前まで/3回以内 (出穂期以降は1回以内)		
	小麦		14日前まで/3回以内 (出穂期以降は2回以内)		
ストロビーフロアブル	麦類 (小麦を除く)	2000~3000倍 (60~150L/10a)	14日前まで/3回以内	QoI剤	11
	小麦				
ミラビスフロアブル	大麦	1500~2000倍 (60~150L/10a)	14日前まで/2回以内	SDHI剤	7
	小麦	1500~2000倍 (50~150L/10a)	7日前まで/2回以内		

注1：必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守る。

注2：薬剤抵抗性の発達を防ぐ観点から、FRACコードが同一のものは連用を避ける。

表3 麦類の赤かび病に登録のある主な薬剤（無人航空機による散布）（令和7（2025）年4月9日現在）

農薬名	作物名	希釈倍数 (散布液量)	収穫前日数/ 本剤の使用回数	薬剤系統名	FRAC コード
シルバキュアフロアブル	大麦	16倍 (0.8L/10a)	14日前まで/2回以内	DMI剤	3
	小麦		7日前まで/2回以内		
ワークアップフロアブル	麦類	10~24倍 (0.8L/10a)	7日前まで/3回以内		
チルト乳剤25	大麦	8倍 (0.8L/10a)	21日前まで/1回		
	小麦		7日前まで/3回以内		
トップジンMゾル	麦類 (小麦を除く)	8倍 (0.8L/10a)	21日前まで/3回以内 (出穂期以降は1回以内)		
	小麦		14日前まで/3回以内 (出穂期以降は2回以内)		
ミラビスフロアブル	大麦	8~16倍 (0.8L/10a)	14日前まで/2回以内	SDHI剤	7
	小麦		7日前まで/2回以内		

詳細は、農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せ下さい。

病虫害情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi\_nousei)」、農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）でもご覧になります。



## トマトにおけるトマトキバガの被害が確認されています

**-発生を確認した場合は、直ちに薬剤防除を実施しましょう！-**

トマトキバガは、主にナス科作物の茎葉に幼虫が食入する害虫で、特にトマトでは、茎葉だけでなく果実にも食入するため、甚大な被害をもたらします。

現在、冬春トマトにおいて本害虫の発生が確認されています。ほ場をよく観察し、発生を確認した場合は、直ちに薬剤防除を実施しましょう。

育苗時等、生育初期の加害は特に被害が甚大となるため、夏秋トマトでは、薬剤の灌注処理や粒剤の施用等を行い被害を防止しましょう。

### 1 被害の特徴

トマトでは、茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる(写真1)。ハモグリバエ類では線的な食害痕(写真2)となるのに対し、トマトキバガではそれよりも幅広の面的な食害痕となる。

果実では、幼虫がせん孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空いて腐敗する(写真3)。へタ元等が加害され、被害に気が付きにくい場合がある。

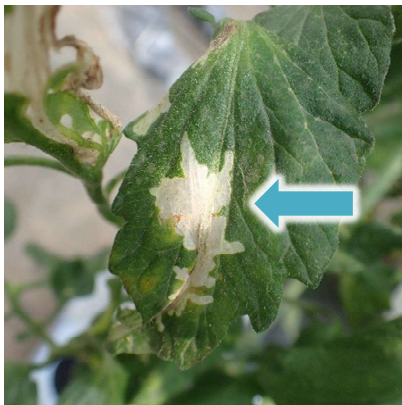


写真1 トマトキバガの被害葉  
(面的な食害痕)

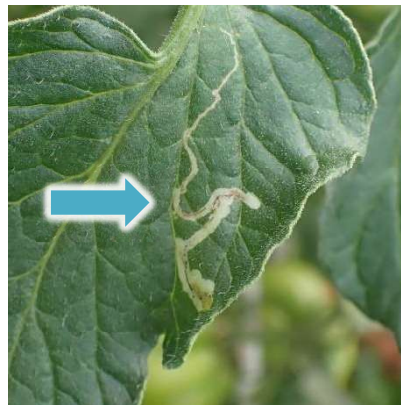


写真2 ハモグリバエ類の被害葉  
(線状の食害痕)



写真3 トマトキバガの被害果  
(○内は幼虫の食入痕)

### 2 形態

成虫(写真4)は、翅を閉じた静止時で体長5～7mm(前翅長約5mm、開張約10mm)である。前翅は灰褐色の地色に黒色斑が散在し、後翅は一様に淡黒褐色である。

幼虫(写真5)は、終齢で約8mmとなる。体色は淡緑色～淡赤白色で、頭部は淡褐色である。前胸の背面後方に細い黒色横帯がある。

卵(写真6)は葉裏等に産み付けられ、大きさ0.36×0.22mmの円筒状でクリーム色である。



写真4 成虫



写真5 幼虫



写真6 卵

### 3 防除対策

トマトキバガの「入れない」、「増やさない」、「出さない」対策を徹底しましょう。

#### 【入れない対策】

- 施設栽培では、本害虫の施設内への侵入防止及びコナジラミ類対策も兼ねてハウス開口部に 0.4mm 目合いの防虫ネットを設置する。なお、ネット等の破れや、すき間からも侵入するため、定期的に点検して破れ等を補修する。

#### 【増やさない対策】

- 発生初期の防除が重要であるため、ほ場内をよく観察して早期発見に努める。疑わしい成虫、幼虫、被害葉、被害果実を見つけた際は、ビニル袋に密閉し最寄りの農業振興事務所に連絡する。
- 育苗期間中に被害が確認された施設及びその近隣地域では、灌注剤や粒剤の苗施用を行い、早期から本害虫の増殖防止対策を講じることが有効である（表1）。
- 定植後等、ほ場内で本害虫の発生が認められた場合は、発生を拡大させないため、トマトキバガに登録のある農薬を散布する（表2）。農薬の使用の際は、必ず最新の農薬登録情報を確認し、薬剤感受性の低下を防ぐため、系統（RAC コード）が異なる農薬でローテーション防除を行う。
- イヌホオズキ、ワルナスビ等のナス科雑草や、野良生えトマト等が発生源となるため、特に注意して除草する。

#### 【出さない対策】

- ほ場やその周辺部に放置された収穫残渣、被害葉及び被害果実は本害虫の増殖源となるため、速やかに土中深く埋却するか、ビニル袋で一定期間密閉し、寄生した成幼虫を全て死滅させたいうで、適切に処分する。
- 施設栽培では、作物の栽培終了時に作物を地際から切断し、一定期間施設を密閉して本種を死滅させた上で、残渣を適切に処分する。

#### 【その他】

- 本害虫は、施設栽培だけでなく、加工用トマト等の露地栽培での被害も懸念されるため、ほ場をよく観察し、発生の有無を確認する。
- 本害虫の寄生植物として、トマト以外の農作物（なす、ばれいしょ等）も報告されているため、ほ場をよく確認し、発生初期の防除を徹底する。

表1 トマト・ミニトマトのトマトキバガに登録のある粒剤等(令和7(2025)年4月9日現在)

農薬名	登録作物 <sup>注1)</sup>		希釈倍数 及び 使用量	使用時期	使用 方法	本剤の 使用回 数	RAC コード <sup>注2)</sup>
	トマト	ミニ トマト					
プリロツ粒剤オメガ	○	○	2g/株	育苗期後半～ 定植時	株元 散布	1回	I:28
プレバソフフロアブル5	○	○	1株当たり 25ml	育苗期後半～ 定植当日	灌注	1回	I:28
ベリマーク SC	○	○	400株当たり 25mL(散布液 量:400株当 り10~20L(1 株当たり 25~50mL))	育苗期後半～ 定植当日	灌注	1回	I:28

注1: 「○」は登録があることを示す。

表2 トマト・ミニトマトのトマトキバガに登録のある主な液剤(令和7(2025)年4月9日現在)

農薬名	登録作物 <sup>注1)</sup>		希釈倍数 及び 使用量	使用時期	使用 方法	本剤の 使用回 数	RAC コード <sup>注2)</sup>
	トマト	ミニ トマト					
ディアナ SC	○	○	2500~5000 倍	収穫前日まで	散布	2 回以内	I:5
ラディアント SC	○	○	2500~5000 倍	収穫前日まで	散布	2 回以内	I:5
ダブルシューターSE	○	○	1000 倍	収穫前日まで	散布	2 回以内	I:未,5
アグリメック	○	×	500~1000 倍	収穫前日まで	散布	3 回以内	I:6
アニキ乳剤	○	○	1000 倍	収穫前日まで	散布	3 回以内	I:6
アフーム乳剤	○	○	2000 倍	収穫前日まで	散布	5 回以内	I:6
エスマルク DF	○	○	1000 倍	発生初期但し、 収穫前日まで	散布	—	I:11A
チューンアップ顆粒水和剤	○	○	2000 倍	発生初期但し、 収穫前日まで	散布	—	I:11A
コテツフロアブル	○	○	2000 倍	収穫前日まで	散布	3 回以内	I:13
トルネードエース DF	○	×	2000 倍	収穫前日まで	散布	2 回以内	I:22A
ファイントリム DF	○	×	2000 倍	収穫前日まで	散布	2 回以内	I:22A
アクセルフロアブル	○	○	1000 倍	収穫前日まで	散布	3 回以内	I:22B
ベネビア OD	○	○	2000 倍	収穫前日まで	散布	3 回以内	I:28
フェニックス顆粒水和剤	○	○	2000 倍	収穫前日まで	散布	2 回以内	I:28
プレバソンフロアブル5	○	○	2000 倍	収穫前日まで	散布	3 回以内	I:28
ヨーバルフロアブル	○	○	2500 倍	収穫前日まで	散布	3 回以内	I:28
グレーシア乳剤	○	○	2000 倍	収穫前日まで	散布	2 回以内	I:30
プレオフロアブル	○	○	1000 倍	収穫前日まで	散布	2 回以内	I:UN

注1：「○」は登録があることを、「×」は登録がないことを示す。

注2：薬剤感受性の低下を防ぐため、RAC コードの異なる農薬のローテーション散布を行う。

詳細は、農業総合研究センター（Tel. 028-665-1244）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「農政部 X（旧ツイッター）(@tochigi\_nousei)」、  
栃木県農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/>)  
でもご覧になれます。



農総研HP

## 麦類赤かび病の増加が懸念されます！追加防除を行いましょう。

5月上旬(8~12日)の調査で、県内各地の二条大麦、小麦において、赤かび病の発生が確認されました。調査ほ場(40地点)における発生ほ場率は12.5%で、過去10年間では赤かび病が多発した昨年度(42.5%)に次ぐ高い値でした。気象庁の1か月の気象予報(5月8日発表)によると、平均気温は高く、降水量は多い見込みであり、今後、本病がさらに増加するおそれがあります。収穫期まで日数のある六条大麦、小麦では**追加防除を実施しましょう。**

**表1 防除適期**

麦種	防除適期
六条大麦	開花始※と開花10日後の2回散布 多発のおそれがある場合、3回目散布
小麦	開花始※と開花20日後の2回散布 多発のおそれがある場合、3回目散布

※抽出した葯を初めて認めた日

本病菌は、人畜に有害なかび毒(DON、NIV等)を産生するため、農産物検査の規格では、食用の全麦種で赤かび粒の混入限度が0.0%を超えないことと定められています。



六条大麦での発生状況(矢印)

**表2 小麦または麦類の赤かび病に登録のある主な薬剤(令和7(2025)年4月30日現在)**

農薬名	作物名	希釈倍数	使用方法	使用時期/ 本剤の使用回数	薬剤系統名	FRACコード
シルバキュアフロアブル	小麦	2000倍	散布	収穫7日前まで /2回以内	DMI 剤	3
ワークアップフロアブル	麦類	2000~ 3000倍	散布	収穫7日前まで /3回以内		
チルト乳剤25	小麦	1000~ 2000倍	散布	収穫3日前まで /3回以内		
ミラビスフロアブル	小麦	1500~ 2000倍	散布	収穫7日前まで /2回以内	SDHI 剤	7
トップジンMゾル	小麦	8倍	無人航空機 による散布	収穫14日前まで /出穂期以降は2回以内	MBC	1

注1: 必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守る。

注2: 薬剤抵抗性の発達を防ぐ観点から、FRACコードが同一のものは連用を避ける。

注3: 散布の際は収穫前日数を必ず確認する。

注4: 無人航空機による散布は、一般の散布とは希釈倍数(散布液量)が異なるので注意する。

詳細は、農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課 (Tel 028-665-1244) までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi\_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます。



# クビアカツヤカミキリの発生が拡大しています！

- 早期発見・早期防除を徹底しましょう -

## 1 発生状況

クビアカツヤカミキリ（写真1）は、もも、うめ、さくら等のバラ科樹木に甚大な被害をもたらす害虫です。本県では2017年の県南西部での初確認以降、現在は県内15市町で被害が確認されています（図1）。

県南西部における成虫初発日は6月4～7日頃の見込み（農研機構メッシュ農業気象データの平均気温（5月25日時点））です。

本虫による被害の発生を防ぐため、こまめに成虫やフラス（フンと木くずの混ざったもの：写真2）の有無を確認し、以下の防除対策を実施しましょう。



図1 クビアカツヤカミキリによる被害が確認された市町（令和6年度5月時点）



写真1 成虫



写真2 フラス

## 2 防除対策のポイント

成虫の捕殺、薬剤散布、飛散防止ネットの設置等、総合的な防除対策を実施しましょう。

### （1）幼虫の防除（4～10月）

- ・フラス排出孔に針金等を差し込み刺殺したり、スプレー剤の噴射（表1）を行う。

### （2）成虫の防除（6～8月）

- ・成虫の飛散と新たな産卵を防ぐため、樹木の被害部を目合4mm以下の丈夫なネットで被覆する（写真3）。
- ・成虫は発見し次第、速やかに捕殺する。
- ・成虫を対象とした薬剤を複数回散布する（表2）。収穫時期に当たるもも・すもも等では、薬剤の収穫前日数や使用回数に注意する。

### （3）卵の確認と防除（6～8月）

- ・卵はブラックライトを照射すると発光する（写真4）。見つけ次第、金属ブラシ等で除去する。



写真3 ネット被覆



写真4 ブラックライト照射で光る卵

**(4) 被害樹伐採後の処置 (9月～翌年の4月)**

- ・伐採木は発生源となるため、速やかに**粉碎、薬剤くん蒸、焼却場での焼却等、適切に処分**する。
- ※ 本種は特定外来生物のため、生きた虫の飼育、運搬、放虫等が法律で禁じられています。  
**伐採木の運搬や保管には、逸出防止措置が必要です。**  
詳細は、所管の農業振興事務所にお問合せください。

詳細な防除方法は[クビアカツヤカミキリ防除対策マニュアル](#)をご確認ください。

**3 果樹のクビアカツヤカミキリ防除に使用できる主な薬剤 (令和7(2025)年5月14日現在)**

表1 幼虫の食入孔に使用できる主な薬剤

作物名	薬剤の名称	使用時期	使用方法	使用回数	IRACコード
もも すもも	ベニカカミキリムシ エアゾール*	収穫前日まで	樹幹・樹枝の食入孔に ノズルを差し込み噴射	5回以内	3(A)
	うめ	ロビンフード*	収穫前日まで	樹幹・樹枝の食入孔に ノズルを差し込み噴射	

\*:カミキリムシ類に登録のある薬剤

表2 成虫発生時期に使用できる主な薬剤

作物名	薬剤の名称	使用時期	希釈倍数 /使用量	使用方法	使用回数	IRACコード
もも	アグロスリン水和剤	収穫前日まで	1000倍	散布	5回以内	3(A)
	アクタラ顆粒水溶剤	収穫前日まで	2000倍	散布	3回以内	4A
	ダントツ水溶剤	収穫7日前まで	2000倍	散布	3回以内	
	モスピラン顆粒水溶剤	収穫前日まで	2000倍	散布	3回以内	21A
	ハチハチフロアブル	成虫発生期但し、 収穫前日まで	1000 ~2000倍	散布	2回以内	
	アクセルフロアブル**	収穫前日まで	1000倍	散布	2回以内	
すもも	テッパン液剤	収穫前日まで	2000倍	散布	2回以内	28
	アグロスリン水和剤	収穫前日まで	1000倍	散布	2回以内	3(A)
	ダントツ水溶剤	収穫3日前まで	2000倍	散布	3回以内	4A
	モスピラン顆粒水溶剤	収穫前日まで	2000倍	散布	3回以内	
	アクセルフロアブル	収穫前日まで	1000倍	散布	2回以内	22B
	テッパン液剤***	収穫前日まで	2000倍	散布	2回以内	28
うめ	アクタラ顆粒水溶剤	収穫7日前まで	2000倍	散布	2回以内	4A
	ダントツ水溶剤	収穫前日まで	2000倍	散布	3回以内	
	モスピラン顆粒水溶剤	収穫前日まで	2000倍	散布	3回以内	22B
	アクセルフロアブル	収穫前日まで	1000倍	散布	3回以内	
	テッパン液剤***	収穫前日まで	2000倍	散布	2回以内	

\*\* :もも類に登録のある薬剤

\*\*\*:小粒核果類に登録のある薬剤

詳細は、農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課 (TEL 028-665-1244) までお問合せ下さい。病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi\_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます。



## ナシヒメシンクイが平年よりも多く発生しています -第二世代幼虫の適期防除に努めましょう！-

### 1 発生状況等

県内4か所(那須烏山市、宇都宮市、芳賀町、高根沢町)に設置したすべてのフェロモントラップにおいて、ナシヒメシンクイ越冬世代成虫が4月に平年よりも多く誘殺されました(図1)。

気象庁の1か月予報(令和7(2025)年5月22日発表)によると、今後1か月の平均気温は平年より高くなる見込みで、本種の発生に適した気象条件が継続することが予想されます。今後、第一世代成虫の発生動向を注視し、第二世代幼虫の適期防除に努めましょう(図1、表1)。

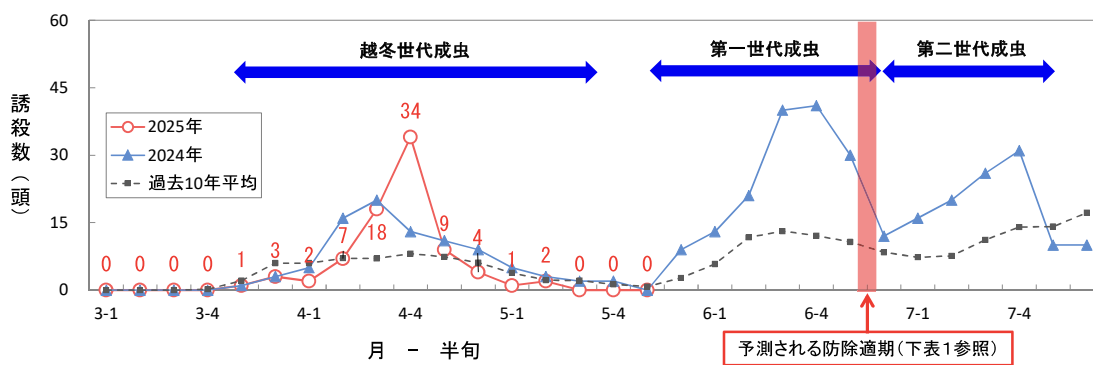


図1 フェロモントラップにおけるナシヒメシンクイ成虫の誘殺状況と防除適期 (那須烏山市)

表1 積算気温によるナシヒメシンクイ第一世代成虫の発生予測日と第二世代幼虫の防除適期

地点	越冬世代成虫の誘殺最盛期※1	予測される第一世代成虫の誘殺最盛日※2	予測される第二世代幼虫の防除適期※3
那須烏山市	4月第4半月	6月17日	6月24~26日
宇都宮市	4月第4半月	6月13日	6月20~22日
小山市	4月第4半月	6月12日	6月19~21日

※1 フェロモントラップ調査結果参照 (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/boujo/yosatsu.html>)。

※2 アメダスデータを活用した予測値。

※3 第一世代成虫の誘殺最盛日から7~9日後が、第二世代幼虫の防除適期。

### 2 防除対策

- (1) なし園内、またはその付近のりんご、もも等の被害新梢はただちに摘除し、園外へ持ち出し適切に処分する。
- (2) 交信攪乱用フェロモン剤を設置することで、次世代以降の発生を抑制する。
- (3) フェロモントラップ調査による第一世代成虫の誘殺ピークを参考にし、第二世代幼虫を対象とした適期防除を実施する(表1、2)。
- (4) 次世代成虫の発生を防ぐため、被害果はただちに摘除し、園外へ持ち出し適切に処分する。  
 ※ 果実の初期被害は葉や果実同士が接触する部分で発生しやすいため、よく確認する。

表2 なしのシンクイムシ類に登録のある薬剤（令和7年5月14日現在）

農薬名	希釈倍数	使用時期	使用方法	使用回数	IRAC コード
スカウトフロアブル	2000倍	収穫前日まで	散布	5回以内	3A
アディオフロアブル	1500倍	収穫前日まで	散布	2回以内	
モスピラン顆粒水溶剤	2000～4000倍	収穫前日まで	散布	3回以内	4A
ディアナWDG	5000～10000倍	収穫前日まで	散布	2回以内	5
ノーモルト乳剤	1000～2000倍	収穫前日まで	散布	2回以内	15
サムコルフロアブル10	2500～5000倍	収穫前日まで	散布	3回以内	28
テッパン液剤	2000倍	収穫前日まで	散布	2回以内	
エクシレルSE	2500～5000倍	収穫前日まで	散布	3回以内	
ヨーバルフロアブル	5000～10000倍	収穫前日まで	散布	2回以内	

### 3 生態等

- ・幼虫は淡褐色で、成熟すると体長約10mm（写真1）。新梢や果実に食入する。
- ・成虫は黒褐色で、体長5～7mm（写真2）。
- ・なし、りんご、もも、うめ、すももなど多くの果樹を加害する。
- ・果樹の新梢が伸びる時期に主になし以外の果樹新梢を加害し（写真3）、その後、なし園に飛来し、なしの果実を加害する（写真4）。

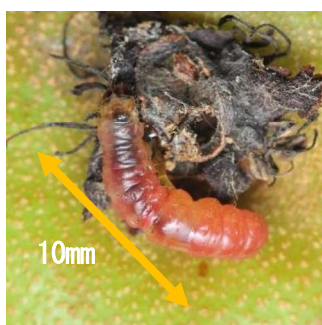


写真1 幼虫

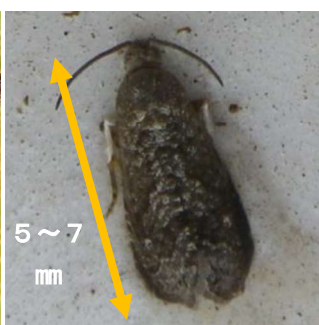


写真2 成虫



写真3 ももの被害新梢



写真4 なしの被害果

詳細は、農業総合研究センター 防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せください。  
 病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi\_nousei)」、  
 農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）  
 でもご覧いただけます。



## 果樹カメムシ類が一部の地域で多く発生しています！

### -園内の定期巡回と防除対策の徹底を！-

#### 1 発生状況等

チャバネアオカメムシは、様々な果樹に被害を及ぼす果樹カメムシ類の一種です。県内6か所に設置したフェロモントラップのうち、矢板市で平年を上回る誘殺数が確認されました(図1、表1)。

気象庁の1か月予報(令和7(2025)年6月12日発表)によると、今後の平均気温は平年より高くなる見込みであり、果樹カメムシ類の活動が一層活発化することが予想されます。本書虫の飛来状況は地域やほ場によって異なるため、園地を定期的に巡回し、飛来が確認された場合は速やかに防除を行いましょう。

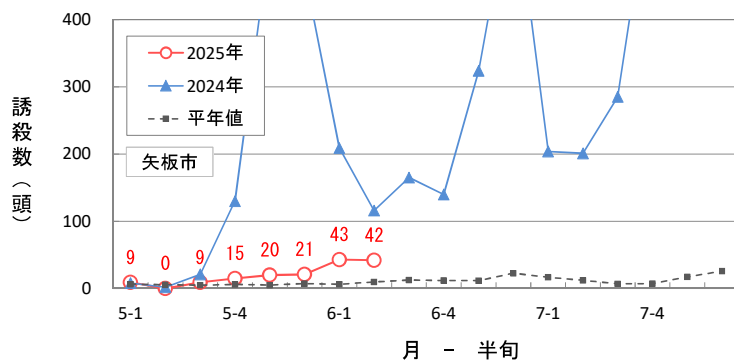


図1 フェロモントラップによるチャバネアオカメムシ誘殺数の推移

表1 フェロモントラップによるチャバネアオカメムシの総誘殺数(5月1半旬~6月2半旬)

場所	総誘殺数 (本年値)	総誘殺数 (平年値) ※	平年比 (%) (本年値/平年値×100)
那須烏山市	21	26	81
矢板市	<b>159</b>	<b>51</b>	<b>312</b>
芳賀町	29	565	5
宇都宮市瓦谷町	9	273	3
宇都宮市古賀志町	22	323	7
佐野市	17	60	28

※ 平年値は、過去10年の値から最高値・最低値の2年を除く8年間の平均値。

[※各地点の誘殺数の推移はこちら](#)

#### 2 防除対策

(1) 果樹カメムシ類の飛来状況は地域・ほ場によって異なるため、園地を定期的に巡回し、飛来状況をよく観察する。特に山林に近い園地や過去に被害の多かった園地では、より注意深く巡回する。

※ 気温及び湿度の高い日には、夜間の飛来量が増加するおそれがある。

(2) 飛来を確認した場合は速やかに捕殺するとともに、表2、3を参考に薬剤散布を行う。なお、果樹カメムシ類は夜行性のため、早朝や夕方の薬剤散布が効果的である。

(3) なし園等では多目的防災網(4mm目合以下)を展張し、園全体を隙間なく被覆する。

(4) 有袋栽培では、早めに袋がけを行う。

### 3 防除対策上の留意点

- (1) 合成ピレスロイド剤や有機リン剤は天敵類に影響を及ぼし、結果としてハダニ類やカイガラムシ類が増えることがあるため、使用に際しては留意する。
- (2) 防除は夕方や早朝の実施が効果的であるが、薬剤散布時には、近隣への薬剤の飛散（ドリフト）や騒音に注意する。

#### 【果樹のカメムシ類防除に使用できる主な薬剤（令和7（2025）年6月11日現在）】

表2 りんごのカメムシ類に登録のある薬剤

農薬名	希釈倍数	使用時期	使用方法	使用回数	IRACコード
スカウトフロアブル	1500～2000倍	収穫前日まで	散布	5回以内	3A
アクタラ顆粒水溶剤	2000倍	収穫7日前まで	散布	2回以内	4A
テッパン液剤	2000倍	収穫前日まで	散布	2回以内	28

表3 なしのカメムシ類に登録のある薬剤

農薬名	希釈倍数	使用時期	使用方法	使用回数	IRACコード
アディオフロアブル	1500倍	収穫前日まで	散布	2回以内	3A
スカウトフロアブル	1500倍	収穫前日まで	散布	5回以内	
アルバリン顆粒水溶剤	2000倍	収穫前日まで	散布	3回以内	4A
スタークル顆粒水溶剤	2000倍	収穫前日まで	散布	3回以内	
ダントツ水溶剤	2000～4000倍	収穫前日まで	散布	3回以内	
ベストガード水溶剤	1000～2000倍	収穫14日前まで	散布	3回以内	
テッパン液剤	2000倍	収穫前日まで	散布	2回以内	28

注1：必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守る。

注2：薬剤抵抗性の発達を防ぐため、IRACコードが同一のものは連用を避ける。

注3：散布の際は収穫前日数を必ず確認する。

～栃木県からのお知らせです～

6月～8月は、「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。



- ① 安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ② いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使しましょう！
- ③ 農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！
- ④ 周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう！
- ⑤ 農薬散布のその後！ 防除器具の洗浄も欠かさずに行いましょう！

詳細は、農業総合研究センター 防除課（TEL 028-665-1244）までお問合せ下さい。  
 病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi\_nousei)」、  
 農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）  
 でもご覧いただけます。



## 斑点米カメムシ類防除のため

### 誘引源となる畦畔等の除草を徹底しましょう！

斑点米カメムシ類（写真1）は、水稻の籾を吸汁し不稔や斑点米（写真2）を発生させる害虫です。今後の発生予測のため、6月中旬に雑草地等（イネ科植物）で発生状況を調査しました。

#### 1 調査結果

- (1) ホソハリカメムシは、平年より多く（平年比428%）、クモヘリカメムシは平年並（表1）。
- (2) 近年発生・被害が増加しているイネカメムシは足利市、ミナミアオカメムシは栃木市で確認された。
- (3) カスミカメムシ類（アカスジカスミカメ及びイネホソミドリカスミカメ）は、平年よりやや少ない。

気象庁の1か月予報（6月19日発表）では、今後1か月の平均気温は高い見込みで、斑点米カメムシ類の活動や増殖に好適な条件です。水稻の出穂2～3週間前と出穂期頃の2回除草を行い、カメムシ類の誘引源、増殖源をなくしましょう。また、出穂期頃から斑点米カメムシ類の防除適期となりますので、それまでに水稻のほ場内外での発生状況の把握に努めましょう。

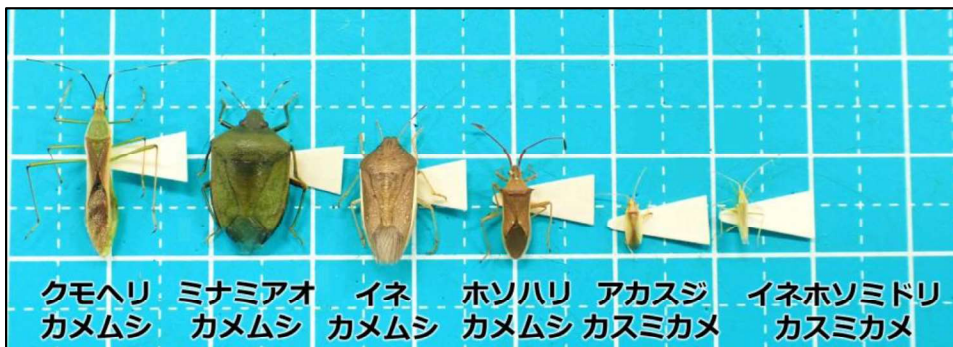


写真1 栃木県における斑点米カメムシ類の主要種



写真2 斑点米

表1 雑草地等すくい取り調査による斑点米カメムシ類捕獲頭数と平年比

種名	本年値※1	平年値※2	平年比 (%) (本年値/平年値×100)
クモヘリカメムシ	0.05	0.05	103
<b>ミナミアオカメムシ</b>	<b>0.05</b>	0	—
<b>イネカメムシ</b>	<b>0.02</b>	0	—
<b>ホソハリカメムシ</b>	<b>4.45</b>	1.04	<b>428</b>
カスミカメ類	37.05	62.71	59

※1 県内全42地点の捕獲頭数の平均値（頭/地点）。

※2 10か年の平均値（平成27（2015）年～令和6（2024）年）。

ただし、イネカメムシは令和3（2021）年～令和6（2024）年の4年間、ミナミアオカメムシは令和元（2019）年～令和6（2024）年の6年間の平均値。

#### 2 防除対策

##### (1) 除草

- ① 水稻の出穂2～3週間前と出穂期頃の2回除草を行う（図1）。

（イネ科雑草の結実を長期間抑え、カメムシ類の水田への侵入を防ぐため）

- ※ 両時期の除草ができない場合は、水稻の出穂期10日前までに除草を行う。
- ※ 出穂期前後のみの除草は、カメムシ類を水田へ追い込み、水稻の穂を集中加害させることになるため、原則行わない。

- ② 水田畦畔、農道、休耕田等のイネ科雑草を結実させないように管理する。

※ 増殖源、誘引源となる水田内のノビエやイヌホタルイなどの雑草は除去する。

## (2) 薬剤防除

### ① 出穂期頃、出穂期から7～10日後の2回薬剤散布を実施する(図1、表2)。

※ イネカメムシによる不稔被害を抑制するためには出穂期頃、イネカメムシを含むすべての斑点米カメムシ類による斑点米被害を抑制するために出穂期から7～10日後の防除が有効である。

### ② その後も斑点米カメムシ類が見られる場合は、7～10日間隔で1～2回追加防除する。

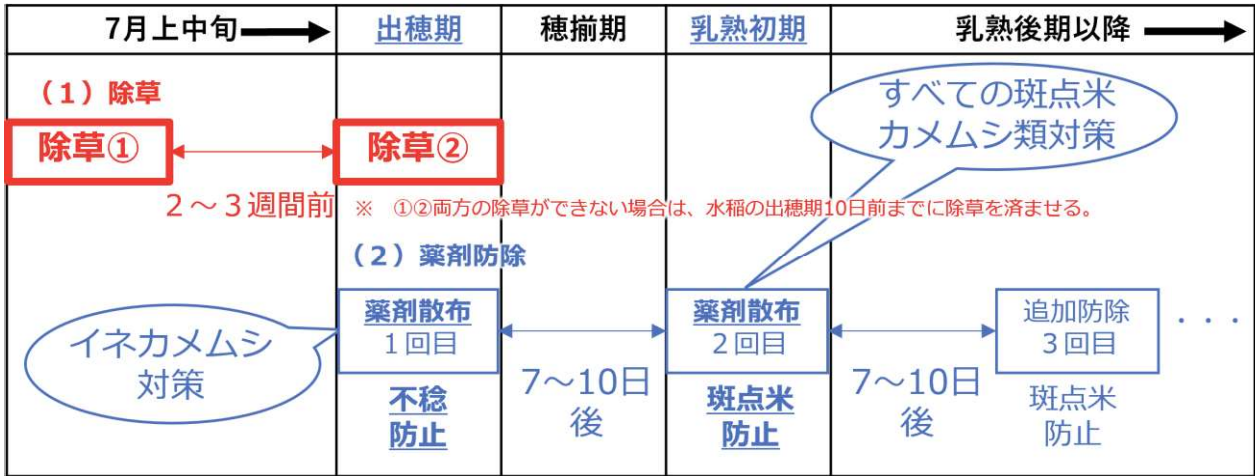


図1 斑点米カメムシ類防除のイメージ

表2 水稻のカメムシ類に登録のある主な薬剤(令和7(2025)年6月19日現在)

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期	本剤の 使用回数	成分	農薬の系統	IRAC コード
スミチオン乳剤	1000倍	収穫21日前まで	2回以内	MEP	有機リン系	1B
キラップフロアブル	1000～2000倍	収穫14日前まで	2回以内	エチプロール	フェニルピラゾール	2B
トレボンEW	1000倍	収穫14日前まで	3回以内	エトフェンブロックス	ピレスロイド	3A
スタークル液剤10	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	ジノテフラン	ネオニコチノイド	4A
エクシードフロアブル	2000倍	収穫7日前まで	3回以内	スルホキサフロル	スルホキシイミン	4C

注1: IRACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

注2: 斑点米カメムシ類に対する薬剤防除は、水田周辺のミツバチに影響を及ぼす可能性があるため、地域の養蜂家に対して薬剤防除日を事前に周知する等の積極的な対応を行う。

詳細な防除対策は以下を参照にしてください。

- ・病害虫防除対策のポイントNo.16「斑点米カメムシ類の防除対策」参照  
<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/boujo/documents/point16.pdf>
- ・病害虫防除対策のポイントNo.23「イネカメムシの防除対策」参照  
<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/boujo/documents/point23.pdf>

詳細は、農業総合研究センター(Tel 028-665-1244)までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、  
農業総合研究センターホームページ

(<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>)でもご覧いただけます。

カメムシ防除作戦のホームページも御確認ください

(<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g05/kamemushi.html>)。



～栃木県からのお知らせです～

6月～8月は、「栃木県農業危害防止運動」の実施期間です。



- ① 安全作業の第一歩! 農薬散布時の身支度は万全に! ② いつものチェック! 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使しましょう!
- ③ 農薬散布のその前に! 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう! ④ 周辺への配慮! 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう!
- ⑤ 農薬散布のその後! 防除器具の洗浄も欠かさずに行いましょう!



農作業中の熱中症に注意しましょう

- ・こまめな休憩、水分・塩分補給を行いましょ
- ・単独作業は避け、一人作業の場合は携帯電話を持ちましょ
- ・体調不良を感じたら、すぐに作業を中断し、涼しいところで休みましょ

